

<論文>

他領民の藩認識—水戸藩領への旅行者を事例に—

高橋 陽 一

はじめに

(1) 問題関心と課題の設定

2000年代以降の日本近世史研究において、大きく進展をみせた分野に藩研究がある¹。「藩世界」「藩地域」というように使用する用語こそ異なるが、藩を総合的に捉えようとする点では各研究グループに共通点が見出せる。それまでの幕藩体制原理の浸透性を個別藩領で検証するような姿勢ではなく、被支配者とされていた領民とそれを取り巻く地域社会やさまざまな社会集団を藩の構成要素として研究対象に組み入れることで、藩を分析軸に広い観点から近世社会をみるのが可能になった²。研究の発展により、藩の内実はより豊かに描き出されるようになったといえるだろう。

本稿は、こうした藩研究をさらに充実させることを意図したささやかな試みであり、その方法は、ある藩を来訪した他領の旅行者の記録を分析するというものである。これまでの藩研究は、基本的に対象とする藩領内の人や物の動静に焦点を当てて進められてきた。藩と藩領外との関連への目配りも指摘され、江戸（幕府）や大坂と藩との関係を論じた成果もある³が、それも藩が政治的・経済的に江戸や大坂と密接につながっていることから研究対象とされたのである。無論、「藩研究」である以上、藩領内が研究対象となるのは当然のことであり、それに何ら異を唱えるつもりはない。ただ、研究をさらに豊かにし、藩の実相に迫るには、他領民がその藩をどのようにみていたのか、という点を確認することも必要ではないだろうか。近世においては、各藩が政治・経済・文化といった面で独自の制度を有しており、領主が異なれば社会の仕組みも異なった。したがって、例えば、ある藩の領民がその藩主の政策を支持していても、他領民からはそれが善政にみえない、あるいはある藩の史料分析から領内の農村荒廃現象が検出されたとしても、他領民からはその領内の人々の暮らしが豊かにみえていた、といったこと、つまりは藩の自己認識と他領民の藩認識が異なるということは十分にありえるだろう。そうした認識の差異が検出された場合、その藩領内の社会状況はそれまでと異なるベクトルで捉えることが可能になってくる。双方のどちらが正しいかを議論したいのではなく、より多面的に、そして客観的・相対的に藩を捉えていくことが藩研究のさらなる充実化につながるとい

うことであり、その点で他領民の藩認識に着目することには意味があるということである。

ところで、藩といえば大名（藩主）とその統治機構、およびその領域（領地）を指すとする見方もあろうが、領民（百姓）なくして領主は存在しえない。近世には、領主は常に百姓を撫育し、その経営維持をはかる「仁君」であり、農民は常に仁君に対する上納のために律儀に出精する「御百姓」であるというという契約関係が、領主・領民間で成立していたといわれている⁴。両者は相互に作用し合っていたのであり、この見方からすれば、藩主・領地のみならず、家臣領民の役務・生活などを含めた総体を「藩」として把握すべきであろう⁵。前述した藩研究の分析範囲の広さもこうした理解に基づくものと思われる。この点を踏まえ、本稿では、藩を構成する要素として藩主家・領地・領民を取り上げ、旅行者の記録からそれらに対する他領民の認識を明らかにし、藩を客観的・相対的に評価していく足がかりを示したい。ただ、そもそも藩主家・領地・領民という要素自体が幅広い捉え方を有しているため、これらについて具体的にどこに焦点を当て、何を明らかにするのか、以下に述べておきたい。

藩主家を対象とするのは、まず端的に藩主は藩の象徴であり、藩のイメージは藩主家のイメージによって規定される側面が強いのではないかと考えたからである。そして、象徴といった場合、その権威や威光がどう捉えられていたのかが焦点になるが、この点先の領主・領民の相互作用性により、藩主の権威は必ずしも強権性を帯びたものではなく、先行研究では、近世の領民が現藩主の安定的統治に謝意を示し、呪術師的機能に跪拝するなど、いわば藩主に信仰心を抱いていたことが明らかにされている⁶。こうした藩主への信仰、ないしは高い関心が他領民からもみられたか、明らかにしたい。

また、藩主家のイメージといった場合、実際に藩主と領民が直接交流する機会がほとんどない以上、それは領民への政策の如何によって決定づけられるとあってよいだろう。近世に登場するいわゆる明君が明君とされる所以は家臣団統制などではなく、領民統治にあり⁷、統治上の政策で根幹をなすのは領民の日常生活や租税収納に大きくかかわる農政だったとあってよい。その農政の成果が反映されるという意味で、領地の農業生産状況に対する人々のまなざしを確認していきたい。

一方、領主は領民の生活を保証し、領民は領主への上納のために出精するという先述の両者の契約関係を人々が認識していたならば、双方が担うべき役割へのまなざしもまた藩認識に影響を及ぼしたであろう。いってみれば、領主のイメージが領民のイメージを規定する半面、領民のイメージが領主のイメージを規定する側面も色濃くあったとみるべきなのである。そうした意味で、領民についてはその気質、すなわち人性や生産労働への姿勢に対する認識を明らかにしていきたい。

以上が本稿の具体的な課題である。研究対象とするのは水戸藩であり、具体的には水戸徳川家の墓所である瑞龍山、2代藩主徳川光圀の隠居所であった西山荘という2つの藩主家史跡、

そして水戸藩領内の領地と領民に対する認識を、領内を訪れた旅行者が書き残した旅日記（道中日記・紀行文）から明らかにしていく。藩主家史跡をめぐっては、藩政改革の理念的前提として藩主家の自己認識を創出するために藩祖廟が整備されるなど、藩主家先祖の神格化が各地で確認できる⁸。創設の目的は異なれど、瑞龍山・西山荘もいわば藩の権威装置としての機能を有しており、藩を象徴する史跡として格好の分析素材になると考えられる。

なお、他領旅行者の記録分析については、小関悠一郎氏が民衆の明君認識を探る観点から熊本藩・米沢藩を訪れた旅行者の見聞録の内容を紹介しており、藩領内の産業や領民の暮らしに関する記述にも言及している⁹。筆者の関心は君主そのものではなく藩にあり、その藩をいかに相対化し、従来と異なる視点でみていくかという点にあるが、本稿は氏の成果に学びつつ、旅行者と藩主家史跡との対面を分析対象に加え、さらに藩領内の産業や暮らしへのまなざしが生み出された背景についても言及するものであり、結果として明君認識の議論にも寄与するところがあれば幸いである。

（2）水戸藩と瑞龍山・西山荘

水戸藩は常陸国のうち、現在の茨城県中部・北部を治めた藩である。関ヶ原合戦後、それまでの領主であった佐竹義宣が出羽国秋田に転封となり、徳川家康の5男武田信吉が入封した。信吉が間もなく死去すると、家康の10男長福丸（のちの徳川頼宣）が入封し、長福丸転封後の慶長14年（1609）に家康11男の鶴千代丸（のちの徳川頼房）が上総下妻藩より25万石で入封した。この頼房が水戸徳川家の初代である。表高は元禄14年（1701）以降35万石で確定する。水戸徳川家は、徳川御三家の中でも唯一参勤交代を行わない江戸定府の藩主であった。

瑞龍山¹⁰（久慈郡瑞龍村）は水戸徳川家の墓所であり、初代頼房をはじめとする水戸徳川家の歴代藩主・夫人・および一族が埋葬されている。その成立は、寛文元年（1661）に亡くなった頼房の埋葬にはじまるが、墓所の様式は2代藩主徳川光圀が儒教の教えに基づいて定めた水戸徳川家独自のものであった。墓所の管理は近世を通じて藩が行っており、瑞龍山守という役人が置かれ、日常的に管理を担当していた。藩の儒学者小宮山楓軒が編纂した水戸藩全域を網羅する地誌『水府志料』¹¹（文化4年〈1807〉）には、「諸士致仕せるもの耄人是を守り、外に役人八人あり。掃除の者十三人あり」と記されており、常駐以外にも8人の役人と掃除担当者が維持管理に携わっていたようである。

墓所を造営した光圀は、寛永5年（1628）に頼房の3男として水戸城下で生まれ、寛文元年（1661）8月、頼房の死去に伴い水戸藩2代藩主となった。一大修史事業である『大日本史』の編纂や那須国造碑などの文化財修復、殉死の禁止といった一連の事績や家臣領民への慈悲深さ、華美を好まぬ人格から明君として名高い人物であり、近世後期には天下古今で特に優

れた5人の明君の1人に数えられていた¹²。儒教式の埋葬は万治元年（1658）に死去した自身の夫人尋子の時にすでに行っており、瑞龍山でも儒葬方式を採用したのである。

西山荘¹³（久慈郡新宿村）は光圀の隠居所である。元禄3年（1690）に藩主の座を養子の綱條に譲った光圀は、翌元禄4年に西山と呼ばれる場所に山荘を営んで移住し、約10年の余生をここで過ごした。御三家の隠居所としては質素なたたずまいであったようだが、光圀存世中には延べ23人の侍臣と士分以外の多数の者が日常的に奉仕していた。元禄13年の光圀没後も藩による山荘旧跡の管理が続けられたが、光圀の17回忌にあたる享保元年（1716）に3代藩主徳川綱條によって旧跡内に恵日庵が創建され、光圀の像が安置された。恵日庵は、光圀が生母の供養のために建立した久昌寺の付属とされ、僧が招かれて旧跡が維持管理されることとなった。文化4年（1807）の『水府志料』には、「今義公の肖像を安じ、僧をして是を守らしむ。柴門、茅屋、庭際自然にまかせられし有さま、皆其時のものをあらためず」とあり、僧による管理が続けられ、自然の中に質素な模様が維持されていた様子がみてとれる。

瑞龍山と西山荘はともに現在は常陸太田市に含まれ、近世には水戸を北上し、太田を経由して棚倉（現福島県東白川郡）に至る棚倉街道から少し離れた場所に位置していた（図参照）。

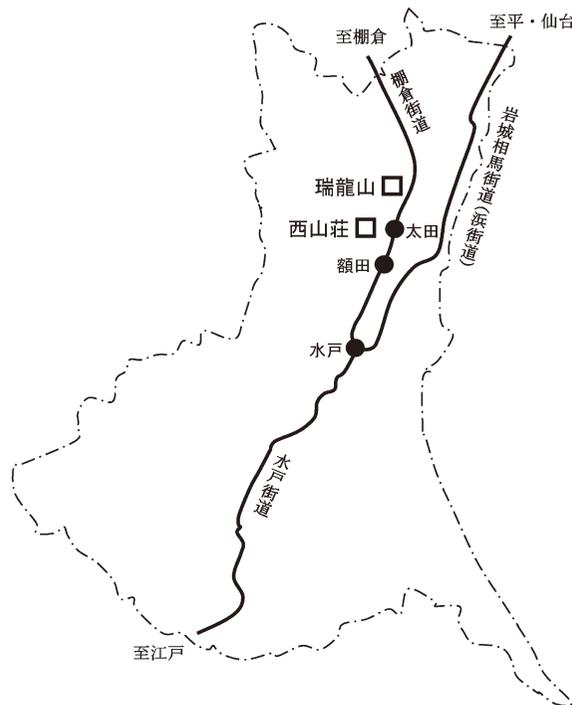


図 水戸藩領関連図（点線は茨城県域）

1 道中日記にみる庶民旅行者の水戸藩領通行

ここからは、具体的に水戸藩領を訪れた旅行者の記録を分析していく。

近世の旅行者が著した旅日記は、大きく道中日記と紀行文に分けられる。道中日記は主に日付、来訪先とその状況、かかった費用を箇条書きなどで簡潔に綴った客観性の強い記録であり、紀行文は時に和歌や俳句を盛り込みながら旅先の状況や故事、著者自身の感懐を記した主観性を帯びた旅の記録である¹⁴。道中日記の著者は村役人などの庶民層が多く、紀行文の著者は武士・学者・歌人などの知識人が多い。まず本章では、道中日記を対象に、庶民旅行者の水戸藩領通行状況と瑞龍山・西山荘の来訪状況を確認したい。

近世の庶民旅行の代表的な目的地は伊勢神宮であり、水戸藩領を通行する他領民は奥羽（東北）地方から南下して伊勢神宮を目指す者が中心をなす。東北地方を出立して常陸国を通過した旅行者の道中日記を収集した堀辺武氏の分析¹⁵によると、総数 41 点のうち 16 点が岩城相馬街道（浜街道）の神岡から、11 点が棚倉街道の徳田から、7 点が結城街道の結城・下館などから常陸国に入り、水戸藩領を通過している（残りは河川等を利用するルート）。このうち、瑞龍山と西山荘を来訪する可能性があるのは棚倉街道を利用した旅行者である。そこで、棚倉街道を利用した道中日記を筆者も収集・解説し、全体のルートと瑞龍山・西山荘の来訪状況を明らかにした。表 1 の通りである。収集したのは 11 点だが、堀辺氏が収集した 11 点とは若干の相違がある¹⁶。

これによると、棚倉街道から水戸藩領に入った旅行者は水戸、あるいは鹿島、那珂湊を經由して江戸に向かい、その後は東海道を西上し、伊勢神宮を経て畿内一円を周回する。帰りは、中山道を利用して善光寺に立ち寄り、日光を經由して在所に戻るパターンが一般的である。また、11 点のうち 9 点が現在の福島県域から出立している点も特徴的であろう。

次に、瑞龍山・西山荘への来訪状況だが、11 点中瑞龍山を訪れたとみられるのは 4 点、西山荘は 2 点である。ただ、瑞龍山の 4 点のうち 1 点（No. 8）は「山林ノ内ニ水戸様御墓所御霊屋并碑アリ」、もう 1 点（No. 10）も「此西あたり瑞応山内水戸様御玉屋あり」と記すのみで、来訪した確証を得ることはできない。さらに、西山荘 2 点のうち 1 点（No. 7）も「黄門様御隠居所有、至て景地之由」と記すのみで、実際には来訪していない可能性もある。いずれにせよ、棚倉街道を利用した他領庶民旅行者で瑞龍山・西山荘を来訪した者は少数であったとみてよい。一方、来訪者の道中日記だが、No. 4 は「瑞龍山不残拝見、尤番人え相願候得は案内在之付拝シテ能キ処也」（瑞龍山）「是は黄門様御隠居処也、殿様御直作之縁在梅之古木在」（西山荘）、No. 7 は「水戸様御殿所瑞龍山与言有、入口ニ番所有之、役人居此役人え連中にて百文遣シ案内相頼申候」（瑞龍山）と記している。瑞龍山に関しては入口で案内人を頼んだこと、

【表1】 棚倉街道通行旅行者 (道中日記) の行程

和暦	西暦	史料名	出典	旅行者名	全体の行程	瑞龍山訪問	西山荘訪問	備考
1	寛延元 1748	水戸鹿嶋通西国記	『小野町史資料編 I (下)』 『須賀川市史近世』	大方氏	飯豊→棚倉→太田→磯浜→鹿島→成田→行徳→江戸→鎌倉→秋葉山→名古屋→伊勢神宮→新宮	×	×	
2	明和9 1772	万覚帳	『須賀川市史近世』	市原氏	須賀川→水戸→成田→行徳→江戸→名古屋→伊勢神宮→新宮→大坂→京都→大田原→須賀川	(不明)	(不明)	原文確認できず。
3	安永2 1773	西国道中法並名所泊宿附	『先察町史研究(2) 源藏・郡藏日記』	古市氏	宝坂→太田→水戸→成田→鎌倉→秋葉山→宮→伊勢神宮→那智山→和歌山→高野山→龜山→山崎→西宮→兵庫→高砂→丸亀→金尾羅宮→丸亀→姫路→日光→宇都宮→宝坂	×	×	
4	天明3 1783	西国道中記	『大越町史2資料編1』	白石氏	上大越→須賀川→棚倉→大田→水戸→鹿島→成田→行徳→江戸→鎌倉→秋葉山→名古屋→伊勢神宮→那智山→和歌山→高野山→大坂→吉野→奈良→京都→北叡山→龜山→山崎→西宮→兵庫→高砂→丸亀→金尾羅宮→丸亀→姫路→日光→宇都宮→宝坂	○	○	瑞龍山の記述「瑞龍山不残拜見、尤番人之相願候得は案内在之付拜しテ能キ処也」 西山荘の記述「此町中よりおにし入え廻申候。是は黄門様御隠居処也 破様御直作之縁在梅之古木在」
5	寛政3 1791	い勢参宮道中記	『梁川町史資料集27』	六戸氏	五十沢→福島→棚倉→大田→那珂湊→成田→江戸→鎌倉→秋葉山→名古屋→伊勢神宮→奈良→吉野→高野山→大坂→京都	×	×	
6	文化11 1814	道中記	『二戸史料叢書6』	安ヶ平氏	日詰郡山→花巻→石巻→松島→塩釜→仙台→福島→須賀川→棚倉→水戸→筑波山→成田→江戸→鎌倉→秋葉山→名古屋→伊勢神宮→奈良→吉野→高野山→大坂→兵庫→丸亀→金尾羅宮→丸亀→姫路→日光→会津若松→米沢→山形→川崎→仙台→高清水→水沢	×	×	
7	文政2 1819	伊勢参宮道中記	鈴木正興編『文政二年釜子駅伊勢参宮道中記』	鈴木氏	釜子→棚倉→太田→水戸→鹿島→成田→行徳→江戸→鎌倉→秋葉山→名古屋→伊勢神宮→那智山→和歌山→高野山→大坂	○	○	瑞龍山の記述「水戸様御殿所瑞領山与言有入口ニ番所有之役人居此役人入連中ニて百丈連シ案内相願申候」 西山荘の記述「お、とのと申ニ黄門様御隠居所有至て景地之田」
8	文政10 1827	伊勢参宮道中記	『梁川町史資料集27』	菊地氏	八幡→福島→棚倉→太田→水戸→成田→江戸→鎌倉→秋葉山→名古屋→伊勢神宮→奈良→吉野→高野山→大坂→兵庫→姫路→岡山→下村→丸亀→金尾羅宮→丸亀→至津→西宮→京都→大津→関ヶ原→中津川→松本→善光寺→高崎→日光→白河→福島→八幡	○	×	瑞龍山の記述「山林ノ内ニ水戸様御臺所御靈屋并碑アリ」
9	天保3 1832	伊勢参宮記	『梁川町史資料集27』	六戸氏	五十沢→福島→棚倉→那珂湊→成田→江戸→鎌倉→秋葉山→名古屋→伊勢神宮→奈良→吉野→高野山→大坂→関ヶ原→大津→関ヶ原→安中	×	×	
10	天保11 1840	伊勢参宮道中帳	『梁川町史資料集27』	池田氏	栗野→福島→棚倉→太田→水戸→成田→江戸→鎌倉→秋葉山→名古屋→伊勢神宮→奈良→吉野→高野山→大坂→丸亀→金尾羅宮→丸亀→至津→姫路→大坂→京都→関ヶ原→高崎→日光	○	×	瑞龍山の記述「此西あたり瑞応山内水戸様御玉屋あり」
11	安政3 1856	伊勢参宮道中記並宿附帳	『三沢郷土誌』	遠藤氏	米沢→福島→棚倉→太田→水戸→成田→江戸→鎌倉→秋葉山→名古屋→伊勢神宮→奈良→吉野→高野山→大坂→姫路→岡山→下村→丸亀→金尾羅宮→丸亀→下村→岡山→姫路→西宮→京都→大津→関ヶ原→中津川→松本→善光寺→厩井沢→高崎→日光→玉生	×	×	

西山荘については古木等があったことに触れるのみで、双方の詳しい説明などはなく、特別な感懐も綴られていない。先述の通り、道中日記の記載は総じて簡潔だが、それでも松島等の景勝地や著名な寺社を訪れた際には、その風景や伽藍を「筆紙に難尽」、つまりは言葉で言い表せないほど素晴らしいといった表現で賛美することはある。だが、瑞龍山・西山荘に対しては、そうした表現も見受けられない。

以上の道中日記に関する分析を総合していえることは、他領から水戸藩領を通行する庶民旅行者は、藩主家史跡に特段の関心を抱いていないということである。これは、瑞龍山・西山荘への来訪割合が低く、訪れても簡素な道中日記の記載にとどまっていることのみならず、旅の全体的なルートからも指摘できる。近世の庶民の旅行ルートには、同じ地点・道を2度通らないようにルート選択が行われるという大きな特徴がある。その理由は、往復のルートを変えることで様々な場所を訪れ見聞を広める、あるいは当時の旅が信仰性を帯びており、巡礼のような円環的行程はその表出である、といった点に求められる¹⁷。主として現在の福島県域を出立した旅行者が奥州道中ではなく棚倉街道を利用したのは、水戸藩領や瑞龍山・西山荘に関心があったからではなく、往路で太平洋側を進んで伊勢神宮に参詣し、帰路で内陸の中山道を通り、日光を経由して帰郷する（奥州道中を2度通ることを極力避ける）という全体のルート選択上の理由からであったと考えられる。また、道中日記には水戸藩の領地・領民に関する記述もみられず、水戸藩領への関心が希薄であったことはこの点からも指摘できるだろう¹⁸。

2 知識人のみた水戸藩領

(1) 知識人旅行者の行程と安藤朴翁『ひたち帯』

次に本章では、紀行文を対象に、知識人旅行者の水戸藩領通行状況と瑞龍山・西山荘の来訪状況を確認したい。道中日記の場合と同様に、棚倉街道を通行した紀行文を一覧にしたのが表2である。収集した紀行文は14点であり、全体の行程と共に瑞龍山・西山荘を訪れているかどうか、領地・領民について記載があるかどうかを○×で表示している。

これによると、知識人の場合は東北地方を周回、または松島を往復するなど、様々な旅の行程の中で棚倉街道を通行していることがわかる。通行パターンも往路の場合もあれば復路の場合もある。ただその中で、No.8の『ひたちのミちの記』のように瑞龍山・西山荘を訪れた後に帰路につく例がみられる点には傾注すべきであろう。庶民とは異なり、知識人の中には瑞龍山・西山荘への来訪を主目的にしている者がいたのである。また、来訪割合をみても、14人(点) 中半数以上の8人が両方を訪問しており、No.6の古川古松軒(『東遊雑記』)は、来訪することを熱望しながらそれが叶わなかったと述べている。水戸藩主家ゆかりの史跡に対する知識人の関心が庶民より高かったことは間違いないだろう。なお、年代による変化に着目すれ

ば、瑞龍山・西山荘を訪れる旅行者の割合が時代が下るにつれて増えているようにもみてとれるが、全体のサンプル数、とりわけ17世紀～18世紀前半の収集史料が少ないことから、現状ではこの点の評価は留保しておきたい。

さて、以上を念頭に置きつつ、他領知識人の水戸藩主家史跡、および水戸藩領に関する認識を読み解いていきたい。最初に、瑞龍山・西山荘を来訪した最も早い例として安藤朴翁（定為）を紹介する。朴翁は伏見宮に仕えた国学者で、元禄10年（1697）3月に京都を立出し、水戸藩に仕える息子抱琴・年山のもとを訪れる旅に出た。息子との対面を果たした後、朴翁は2人を連れて西山荘・瑞龍山を訪れた。そこでの様子は、『ひたち帯』に以下のように記されている（「No.」は表2のもの。以下同）。

【史料1】安藤朴翁『ひたち帯』（元禄10年〈1697〉、No.1）

（西山荘）橋をわたりて竹扉を入ぬれハ、かれこれ出迎へあないして御前へまいる、世の人泰山北斗のこたくあふき奉る御名を余所なから聞及ひまいらせしにあやまたす、威ありてのどやかにうやゝ、しうしてやすらかある御容貌也、御冠を掛させ給ひて後ハ披髮長髪野服瀟洒としてまことに塵外の御姿すかゝ、しく見えさせ給ふ、御すまゐのさま松のはしら茅か軒は竹のおばしますへてさらゝ、しく墻壁にハ蔦むくらなどはひのほりつゝ、かの末つむ花の古宮の心地し侍り、さしも金城湯池の貴富をいとやく当代へまいらせられて、かゝるやつゝ、しき御すミかも元より御はいのことゝハ申なから、愚かなるまなこよりハ御いたましきかたにとおほえ侍る、東語物語や、時うつりて晚餐を賜はる、調味いとこまやかにして枯腸をうるおしはんへりぬ…やかて翁か盃めしぬれハかしこまりなから奉りて千世ませとくりことす、満座とりゝゝにうたひのゝしりにきハ、しき声々山祇もおとり出へきよるのさま也

（瑞龍山）瑞龍山へ参る、此山ハ源威公の御時に御親族墳墓の地にしめ置せ給ひしとそ…山上に故正三位権中納言水戸侯源威公之墓…そのほか御一族の墳墓にいたるまでことゝ、く儒礼をもちひてほうふり給へハ、螭首亀跌馬鬣封にして石を畳ミ垣をめくらして、甚清浄なるさま御孝志のほともいちしるくそ拝し奉る…山のかたはらに西山公の寿蔵あり、その碑面に御ミつから梅里先生墓とするさせ給ひ…予この御文章にふかく感情おこりて道すから子侄にかたらく、本朝上世より公武の家々に達人あまた出おはすといへとも、文人ハ武を講せず、武士ハまた文道にうとくして共に遺憾あり、今西山公文武の全才ゆたかにして、士をしたしミ、民を恵ミ之礼に厚うして奢をしりそけ、諫を用ひて佞を遠さけ、古をしたひて今を廃す、善行のミつたへて邪なる御政をきかす、汝等さひはひに此賢將の営中に属しぬれハ、志をはけミ行をみかきて忠勤怠るへからすなといへは、ミなれいのうなつく

6月12日に西山荘を訪れた朴翁は、隠居中であった徳川光圀と対面する。その姿は、威厳

がありつつ穏やかで、高貴にして安らかであった。西山荘は茅の軒端や竹の勾欄などすべて小ざっぱりしており、垣や壁に蔦がはっている様子はさながら古宮のようで、本人の意向とはいえ、このようなみすばらしい住まいは痛ましくもみえた。光圀を交えての宴席の賑わいは、「山祇」（山の神）も躍り出てくるかのような様であった。翌日、瑞龍山を訪れた朴翁は、螭首亀趺・馬鬣封といった儒礼墓石の様子を詳しく記し、その清浄な様に水戸徳川家の孝志をみてとる。また、光圀（梅里）の寿蔵の碑面に感動した朴翁は、「文武の全才ゆたか」などと光圀の功績を激賞し、息子たちに藩への忠勤を怠らぬよう命じている。

当時すでに世間に名をとどろかせ、仰ぎ見るような存在であった光圀との対面を果たした朴翁は、その姿や立ち振る舞い、住まいである西山荘や瑞龍山の寿蔵に相当なインパクトを受けている。山の神が現れそうな雰囲気、上世以来存在しなかった類まれなる文武の才能の持ち主といった表現、捉え方からは、俗人を超越した存在として光圀を崇拜する意識が看取できる。後述との関連でいえば、具体的に善政を施した治者の側面よりも、文武を理解した全能の聖人としてのパーソナルな部分が崇拜の対象とされているといえよう。

（2）近世後期の知識人と瑞龍山・西山荘

続いて、近世後期の瑞龍山・西山荘について、紀行文の記述を検証していきたい。徳川光圀没後の瑞龍山・西山荘はどのような様子であり、訪れた知識人たちはこれらの史跡から何を感じ取ったのだろうか。以下、土佐国高知藩出身の国学者池川春水、備中国岡田藩出身の地理学者古川古松軒、備後国福山藩出身の儒学者菅茶山、陸奥国二本松藩士で郡奉行等を歴任した成田鶴斎、紀伊国和歌山藩松坂出身の商人・蔵書家小津久足の紀行文を列挙して確認してみよう。

【史料2】池川春水『奥遊日記』（明和8年〈1771〉、No.3）

（瑞龍山）麓の番所にて、御代々の御墓を拝み奉り度、是迄参りたりと願ければ、番の足軽など上番に伺ひ許容して、足軽壺人案内す…義公の御寿蔵六尺四面、其造り甚儉素にていさゝかも花美なし。惣而此瑞龍山へは僧徒を入ず。

（西山荘）庭の景、天然のまゝをたよりて、作意を加へず。ありのまゝなれど、山の形いとあやしく妙にして絵に書とも筆にも及びかたし。里近く山も高からねとも、をのづから深山幽谷の気色あり。峯の松風、笈の水の音、物閑にして、緑の梢、池水に沈むありさまなど、実も桃源の仙境もかくやと思ふばかり也

【史料3】古川古松軒『東遊雑記』（天明8年〈1788〉、No.6）

（西山荘）是より西八丁に西山村と云ふ勝地あり。此にして、奥の所は中納言光圀公御隠居

ありし所にして、此君の賢徳は普く世人のしる事にして、西山遺事と号せし書に粗其徳をあらはせし事なり。

【史料4】菅茶山『ひたちのみちの記』（文化元年〈1804〉、No.8）

（西山荘）西山ハ東山に比すればひきゝ、また甚ふかゝらざれども幽邃也。農家の前を山麓にしたがひて、四五丁ゆけば義公の菟裘也。茅屋石階屋しきも狭く、屋も甚美ならず。庭石ハ木理のある石、封内より出るを用ひ、（ことさらに）大石巨磐をあつめたる豪拳も見へず。公のいませし時を想見して、感涙を催すばかり也。

【史料5】成田鶴斎『南轡紀游』（文政6年〈1823〉、No.9）

（瑞龍山）御廟へ上り口ノ下馬ニ足輕番所アリ、番所へ立寄御廟ヲ拝シ度旨ヲ頼メハ番人先立ヲシテ登ル、尤帯剣ヲ禁ス…御廟ハ御一方毎ニ切石ノ石壁ヲ築キ立、四方ニ栗角ノ柵ヲ廻ラシ、其真中ニ馬鬣封あり…義公ノ御石碑ハカリ覆ヘル龕有テ見ヘス

（西山荘）真ニ清閑幽寂ノ御山荘也、御築地ノ廻リニ氣柳四五株栽サセ玉フ由、西山遺事ニハ書記シタレト今ハ柳ハミエス

【史料6】小津久足『陸奥日記』（天保11年〈1840〉、No.12）

（瑞龍山）かゝるやんごとなき君だちの御廟どもを、かく拝礼し奉れるは、身におはざることなれば、はゞかるべきすぢなれど、こはもはらこの義公の御廟を拝し奉らんがためにて、文事にあづかるものは、この公の御恩沢をかうぶれることのすくなからぬゆゑなりけり…この瑞竜山の御ことは、『御行実』『桃源遺事』などにはしくみえ、舜水先生の墓の事は、おなじ人の『行実』にもしくはしく見えたり。

（西山荘）そこより御庭にいづ。すべて御すまひのさま、華美にはあらず、質素をむねとせられて、あさぎの柱のふしがちなるに、わらぶきの屋のむねには鶯尾草^{イチハツ}をうゑられたり…こちたくつくりなしたる庭のさまには、はるかにまさりて、たとしへなく幽邃なるさま、たぐひあるべき御庭のさまにあらず。かの『ひたち帯』に、「かゝる、やつゝしき御すみか、もとより御ほいの事とはまうしながら、おろかなるまなこよりは、御いたましきかたにぞ、おほえ侍る」とあるがごとく、おもひのほかわびしき御住居にて、御庭のひろからぬも、なかゝゝに御心しらひのふかゝりしを、かしこくおもひ奉らる…はやく宿志とげて隠遁の身となり、つひにはさまをかへて、風流をむねとせまほしき望あれば、この御山荘のさまは、身にしみておほゆるばかりにて、すゞろに涙もゝよほすばかりなり…そもこの山荘の御ことは、『御行実』『桃源遺事』『ひたち帯』、安藤為章が『西山賦』、又おなじ人の『年山記聞』などに、そのさま、いとくはしくしたれば、今さらつたなき筆にかきけがさんよりは、とその書どもにゆづり

て、くはしくはしるさず。

まず、瑞龍山についてだが、光圀没後も藩の管理が継続しており、入口の番所で願い出れば、番人の足輕の案内のもと、墓所を参拝することができた。光圀の寿蔵は変わらず華美のない様子であるが、鶴斎が訪れた際には龕（厨子）に覆われて実見できなくなっていたようである（史料5）。また久足は、こうした藩主家の廟に拝礼するのは不相応で憚るべきだが、それはただ義公（光圀）の廟を拝したいがためであり、文事に携わる者は光圀の恩沢を受けるところが少なくないからだと述べる（史料6）。蔵書家であった久足は、光圀の言行録である『御行実』（『義公行実』のことか）・『桃源遺事』などを通読しており、光圀への敬慕の思いを深くしていた。

次に、西山荘についてだが、深山幽谷の気配の中で、自然と調和した物静かなたたずまいは光圀没後も変わることはなく、「桃源の仙境」（史料2）、すなわち俗世間と隔絶した聖地のようだと認識されていたのである。久足が安藤朴翁の『ひたち帯』を引用して語っているように、思いのほかわびしくみえる姿も不変であるが、それがまた風情を醸し出しており、決して華美にならず、質素で幽邃なたたずまいに、みる者は在りし日の光圀の生き方を重ね合わせ、感涙にむせぶのであった（史料4・6）。旅の行程を付け加えれば、茶山や久足は瑞龍山・西山荘の訪問後に進路をUターンしており、この点からも彼らにとって両史跡がいかに重要であったか、言い換えれば彼らがいかに光圀に心酔していたかを推し量ることができよう。

ところで、ここで検証してきた紀行文の記載で目に付くのは、旅行者の知識人が『西山遺事』（＝『桃源遺事』）を取り上げていることである。幕府の巡見使に随行していた古松軒は、公務である都合上西山荘訪問を果たせなかったが、『西山遺事』から光圀の賢徳を認知しており（史料3）、鶴斎は同書から西山荘に柳が植えられているものと思っていた（史料5）。久足も同書その他の文献から、瑞龍山・西山荘の詳しい情報を得ていた（史料6）。『西山遺事』は光圀の言行録であり、光圀が没した翌年の元禄14年（1701）に、彼に仕えた三木之幹ら3人が編纂した。和文体で事蹟・逸話を豊富に盛り込み、近世に出版されることはなかったが、写本として全国に流布し、後世の光圀像の形成に大きな影響を及ぼした¹⁹。近世において、明君の評判は口伝で広まったのではなく、巷間に流布したこうした「明君録」によって広まったと考えられている²⁰。『西山遺事』²¹は、光圀が為政者として行った諸政策よりも、パーソナルな面での彼の有徳ぶり、すなわちすぐれた品性や人徳の顕彰に重点を置き、様々なエピソードを紹介している。それは、例えば後述する本稿との関わりでいえば、病が重篤であった晩年、將軍徳川綱吉が何度も派遣した病氣見舞いの使者に対し、必ず西山荘から水戸城に向向いて対面するなど、礼節に厚かったこと、学問・文化に関心を示し、儒臣に村方での経書講釈を命じて領民の教化につとめたこと、孝行で農業に励む百姓に賞金を与え、鰥寡孤独の者に扶持を与

えるなど家臣領民を普く慈しんだこと、隠居後は宝物等ではなく書物のみを西山荘に持ち込み、粗食を旨として質素を好んだこと、などである。さらに、瑞龍山・西山荘のことはもちろん、鶴斎が言及した通り荘の垣の周囲に柳が植えられていたことも記されている。

近世後期に瑞龍山・西山荘を訪れた知識人は光圀を崇拜し、いわば彼を偶像化しているが、これは近世前期の朴翁の認識と変わるところはない。ただ、現実に光圀と対面してその思いを新たにされた朴翁に対し、後年の知識人は既存の書物によってあらかじめ光圀像を形成していたと考えられる²²。近世後期に高まる家や地域にまつわる歴史的遺物への関心に焦点を当て、日本の記念碑文化の意味を検討した羽賀祥二氏は、史跡は自然や人々の生活環境を含んだ景観の中で存在し、それを見た人々に懐古の情を抱かせ、敬礼を促す作用をもたらすとする²³。氏が対象としているのは何からかの事柄を顕彰する記念碑であるが、本稿で取り上げた瑞龍山・西山荘も史跡として同様の作用をもたらしたといえるだろう。ただし、旅行者が史跡のみから懐古の情や敬礼の意識を抱いたというよりは、事前に書物によって醸成されていた敬慕の念が、史跡によって刺激され、溢出したと考えるべきであろう。

(3) 知識人がみた水戸藩の領地・領民

旅行者と水戸藩主家史跡についての分析をいったん終え、次に藩の他者認識のもう1つの大切な要素となる領地・領民への認識を明らかにしていきたい。具体的には紀行文から水戸藩の領地・領民に関する記述を抜き出すことになるが、本稿の課題に照らし、領地といっても領内の風光明媚な景勝地の記述などではなく、領民の基本的営みである農業生産（地味）に関する記述を、領民については人性、つまりは民情や気質がうかがえる記述を検証の対象とする。

まず、表2から明らかになるのは、元禄10年(1697)の安藤朴翁『ひたち帯』以降、安永7年(1778)の伊能忠敬『奥州紀行』に至るまで、他領民知識人による水戸藩領地・領民の記載がほとんどみられないということである。唯一領地の記載がある池川春水『奥遊日記』においても、わずかに領内棚倉街道沿いの額田から三里は畑あるいは松林であり、それを過ぎると左右が水田であると記されているのみで、土地の生産状況への言及はみられない。18世紀後半に至るまで、他領知識人の水戸藩領に対する関心は希薄であったと考えたいが、表2のサンプルのみからこれを即断するのは無理があるだろう。ただ、水戸藩領を対象とした旅ではないが、近世前期に客観的な情報誌として紀行文の新たな方向性を拓いた林羅山『丙辰紀行』²⁴(元和2年〈1616〉)や、同じく近世前期を代表する紀行文作家で、知的な情報伝達を主とした近世紀行の基礎を築いたと評価される貝原益軒の主要著作『東路記』²⁵(貞享2年〈1685〉)『己巳紀行』²⁶(元禄2年〈1689〉)『壬申紀行』²⁷(元禄5年〈1692〉)でも旅先の土地や民情に関する記述はほとんどみられない²⁸。詳しくは、さらにサンプルを収集した後に検討しなければならないが、水戸藩を含め、近世前期においては、藩の領地・領民に対する他領民

の関心が総じて希薄であったという見通しを持っておきたい。

水戸藩の領土・領民に対する他領知識人の記述が明確にみられるのは、天明8年（1788）の古川古松軒『東遊雑記』からである。彼らは水戸藩領をどのようなまなざしで捉え、農業生産や人性にどのような印象を抱いたのか。以下、具体的に史料を挙げて検証していこう。

【史料7】古川古松軒『東遊雑記』（天明8年〈1788〉、No.6）

（太田）扱常州に入りて上国の風に見え、人家のもやうもよく、百姓の妻子に至るまでも賤しからず。作業も出精せると見えて作物も見事にて、士をみて、礼をせざるはなし。小児に至るまで平伏して、無礼の体更になし。…常州に於ては貴賤共不礼の体、更に見えず。予按るに、光圀公世に知る賢君にて国をおさめ給ひし事、普く世人の云事にて、此君の御遺風にて、かくまでもきは立、奥羽に勝れて見ゆる事也と、人々評判せし程の事也。当君も東都に於て賢君也と称誉せる事也…太田発足、五里枝川休、二里半長岡止宿…此辺の百姓家いよゝゝよし。此せつ稲を蒔入るゝ時節にて、農業の体を見に、国の風俗にて婦人かひゝゝしく、小児に至るまでも、業を大切に勤る体なり。宿々に於ても、御巡見使の事なるゆゑに、念の入料理なども賤しからぬ取組なり。兎角、味噌・醤油の味ひあしきには、人々困りし体なりと云ふ。光圀公の御時代より、民の奢を大に制し給ひ、分外の暮しをする百姓あればきびしく罰し給ひ、驕らずして家業に出精せる百姓は、案外に賞し給ひし事にして、友吟味にして、互ひに奢の道をかたく慎みし故、いつとなく国の風俗となりて、今にても味噌・醤油の味ひよきを食せる百姓は奢り者と云ひふらし、是等の事をもつて万事をおもふべし。

【史料8】菅茶山『ひたちのみちの記』（文化元年〈1804〉、No.8）

（太田）額田の南より此あたり、すべて沃土と見へ、民物も多く、岡陵の上までもミな田圃也。水戸の近傍ハ秧を挿こと至て密也。このあたりハ疎濶なり。また紅花を多くうへて、此ころ采り製す。

（小幡）樺山より小幡迄ハ、水戸の封内にて、民撲にして礼あり。馬卒の騎れるもの、人に逢ふて下り、農夫の耕もの道を問へば、笠をぬぎてこたふ。宗藩の民よろづなめけなるべしと、おもひしに、さあらぬハ賢君の余沢なるべし。この間旅行の人多からず見ゆれど駄店ハあしからず…水戸の前後、大田の山中迄米甚よし、しらげもくハし。道すぢすべて田うへ、麦うつさかり也。このあたりまた、こかひすると見へて、繭のほしたるを、処々にてみる。

【史料9】成田鶴斎『南輪紀游』（文政6年〈1823〉、No.9）

（太田）太田ノ治下ニ至ル、四方トモニ甚広平ニシテ田圃開ケ目ノ及フ処畳ヲ布ルカ如シ、尤地モ肥饒ト見ユ

(大久保) 当時詩家天民ノ出ル処ト云、又岩城界磯原村ヨリモ岩城安藤侯儒官朝日某出ル、義公文化ノ遺、民間ニモ好學ノ者多シト見ユ、此日途上麦穂抽紫蕨肥大ノモノ生セシヲ見ル

【史料10】小津久足『陸奥日記』（天保11年〈1840〉、No.12）

(太田) まことに、きのふけふ見めぐりし所々のさまの、よにもことなるさま、かばかりたゞしき風の今にのこれること、まつたくこれ義公の御余沢の千とせをかけてうせざるしるし、とすゞろに感をもよほしつ。

(三日の原) このまへに饅頭をうる家に馬とゞめて、茶をこひたるに、「今、茶はなし。あたゝめなば、時うつりなん。隣の家にて饅頭をもとめて、茶をのみたまひね」といへるは、利をあらそはざる質朴の風、賞すべし。そのみならず、馬夫も礼儀いとたゞしく、しれる馬夫の馬ひけるにあへば、たがひにかぶれる手拭をとりて、目札をたゞしくせり。

(白河) 先、浜街道のことをいはず、俗に米国といふあたりなれば、飯はことをかくべくもあらねど、昼飯くはむ、とてよる茶屋には、さきにいふごとく、飯のとほしきもあり、「はた一足のたがひにて、先によれる旅人はくへれど、そのゝこりなし」といへる家もありて、ほどよくあるは、氷のごとくにひやゝかなり。かく米国とはいへど、すぎし荒年にて、家などたふれたるが、そのまゝにくちのこれる柱などのみえたるは、あまたなり。

まず、領地についてみていきたい。古松軒は、常州（＝水戸藩領）を「上国」の風土とし、領民の出精により作物は見事であると評価している（史料7）。また、久足は松島への旅の帰り、白河で旅路を振り返った際、水戸藩領を含む浜街道（奥州街道と対置しての言い方）地域は「米国」であり、食に事欠くことはないと述べている（史料10）。とりわけ、棚倉街道の額田から太田にかけては広大な田園が広がっており、茶山が「沃土」（史料8）、鶴斎が「肥饒」（史料9）と表現するように、このあたりは実り豊かな土地であった。このように、18世紀後半以降の他領知識人は、こぞって米が豊かに取れる領地として水戸藩を捉えている。無論、彼らはどの領地に対しても同様の評価をしているわけではない。後に述べるように、古松軒などは疲弊した町や村のことも包み隠さず指摘しており、水戸藩で米が豊富に取れるという旅行者の評価は他領との比較から導き出されているといつてよい。

一方、従来の研究はこれとは異なる見方で当該期の水戸藩領を評価してきた。乾宏巳氏によると、関東農村では天明飢饉以降天保飢饉をピークに荒廃現象が著しく、この時期の水戸藩でも重課税による農民疲弊や地主の土地集積、さらには人口減少などによって農村荒廃が進んだ。水戸藩天保改革の主要課題は、この農村荒廃に歯止めをかけることにあったという²⁹。ここで指摘されている農村荒廃は領民を取り巻く社会経済状況全般の変化によってもたらされた現象であり、必ずしも領地の農作物の収穫状況、つまりは「米が取れるか取れないか」のみに

起因する現象ではない。領内が社会的・経済的に荒廃しており、だからこそ天保改革が要請されたという捉え方は成り立つだろう。ただ、農村荒廃が進んだとされる天明から天保という年代は、史料7から10の年代と全く一致しており、飢饉はもとより、農民疲弊や人口減少は荒地の増加、ひいては農作物の収穫減につながる兆候である。米が豊富に取れる土地であるという情報を軸に領内の史料を改めて分析することで、荒廃とはまた別の社会状況を捉えることも可能になるのではないか。あるいは、この現象は土地が肥沃であるにもかかわらず進行した社会構造上の荒廃として特徴づけるべきなのだろうか。いずれにせよ、他領知識人の水戸藩認識は、当該期の新たな社会評価を見出す座標軸になる可能性を秘めているといえよう。

次に、領民について確認してみよう。水戸藩を「上国」と捉えた古松軒は、領内の家居の良さと領民の礼儀正しさに感服している(史料7)。また、質朴さも特徴的だったようで、茶山は「民撲にして礼あり」と評し、久足は領内三日の原の饅頭屋で茶を求めたところ、「うちには無いので隣の家で求めてほしい」と返答されたエピソードを添えて、「利をあらそはざる質朴の風」だと、領民の人となり賛辞を送っている(史料8・10)。彼らにとって水戸藩領民は、礼儀と質朴さを兼ね備えた模範的な人々であった³⁰。

ここで注目したいのが、こうした礼儀正しく質朴な領民の人性が徳川光圀の遺沢だと考えられていることである。古松軒は、光圀は世に知られた「賢君」であって、その「御遺風」によって領民の礼節が際立ち、奥羽に勝ってみえたと述べ、さらに光圀が領民の奢侈を制禁し、家業に出精する百姓には賞を与えたため、奢侈を慎むのが「国の風俗」となり、農業面でも女性がかいがいしく働き、子供までも農業に励むのだとする(史料7)。茶山も宗藩(将軍家と血縁のある藩)の民は何かと無作法だと思っていたが、水戸藩がそうではないのは「賢君」(光圀)の余沢であるとし、久足もまた、瑞龍山・西山荘ほか水戸藩主家ゆかりの史跡のありさまや正しい風習が今に残っているのは光圀の余沢が失われていないからだと受け止めている(史料8・10)。ここでの風習とは、領民の質朴さや礼儀正しさを指していると考えられよう。また鶴斎は、光圀の文化面での遺沢により、水戸藩では民間でも好学者の者が多いと述べている(史料9)。ここで各人が賛美しているのは、「賢君」という言葉から明らかなように、偶像化された聖人光圀ではなく、領地をおさめる君主、すなわち治者としての光圀である。先述のごとく、他領知識人の光圀像形成に影響を与えた『西山遺事』には、光圀が親孝行で農業にも出精した百姓を善行者として表彰するエピソードが紹介されており、身分を問わない信賞必罰の姿勢を読み取ることができる。さらに、光圀が実際に学問・文化の興隆をはかったことはよく知られており、『西山遺事』には領民の教化につとめたエピソードもみられる。百姓が驕らず農業に出精し、また民間に好学者が多いという言説は治者光圀の遺沢だと把握できよう。

一方で、礼節や質朴といった領民の人性については、治者としての具体的な政策よりも光圀のパーソナルな側面に由来する言説だと考えるのが妥当であろう。『西山遺事』には礼節に厚

く、質朴な光圀の人柄を偲ばせるエピソードが記載されており、これに影響された他領知識人は、18世紀後半以降の水戸藩領においても光圀の人格が領民に遺沢として根付いていると考えたのだろう。ただ、光圀の威光がどれほど絶大であっても、実際に領民個々人が光圀を意識して質素な振る舞いをしていたとは考えにくい。いかに秀でた人格の明君が存在していたとしても、それが100年後の領民の精神に受け継がれているという言説を現実的に受け止めることは難しく、治政面でも光圀による奢侈の戒めが「国の風俗」となって領民に引き継がれていることは立証が困難である。こうした発想は近世知識人の思想的な特徴なのかもしれないが、いずれにせよ光圀の威光の影響を濃厚に受けているのは、領民よりもむしろ他領知識人だったといえるのではないだろうか。

3 領地・領民へのまなざしの背景

他領知識人たちが水戸藩の領地・領民を注視していたのはなぜであろうか。

青木美智男氏によると、本草学の発達と共に全国でさまざまな特産物の生産が開始され、それらが都市部で消費されてブランド化されると、近世後期には各地の産業の現場が名所として人々の関心を集めるようになり、旅先での生産現場を記録する産業観光芸芸が登場したという³¹。この点、菅茶山は水戸藩領で紅花が栽培されている様子も活写しており（史料8）、知識人の農業生産へのまなざしも特産品生産を背景にした産業観光として理解できよう。ただ、そのまなざしがみられるようになるのが天明8年（1788）の古川古松軒からである点、そしてそれが基本的に米作りに向けられている点を勘案すると、別の背景が浮上してくる。

古松軒の旅は幕府派遣の巡見使への随行であった。江戸幕府の諸国巡見使は、5代將軍徳川綱吉以降將軍代替わりの際の恒例行事となっており、天明8年（1788）の場合は11代將軍徳川家斉の就任に伴う派遣であった。巡見使一行は東北一円と松前を視察しているが、その目的の1つは天明3年から4年にかけて東北地方を襲った天明飢饉後の社会の観察にあったとみられる。事実、古松軒は『東遊雑記』の中で、各地の飢饉後の状況を書き留めている。

【史料11】古川古松軒『東遊雑記』（天明8年〈1788〉、No.6）

（平館）弘前より此辺（平館＝高橋注）までに田畠の荒所広大なるゆゑに、如何の事と御巡見使より御吟味ありしに、六年以前の卯年に早霜降り候て稲作悉く枯れ、米一粒も出来申さず、いろゝと才覚いたし候得ども、兼て貧窮の者はいかんともしがたく、飢渴し相果しもの数多にて、是非なくかくのごとしと云。昔時より米は沢山なる所にて、多く用意といふ事のなき故右のごとく、万事に斯のごときの事多し。心得にもなるべき事なり。

（青森）青森に止宿す。此所は諸書にも記し、津軽第一の津湊にして、市中三千軒繁昌の地

とあれども、さやうの所にはあらず。昔は左もありしや、今はやう、千軒ばかりにして、しかも家居も見苦しき、松前の地御城下并江指浦・箱館浦より見れば勝劣の論なし。去ながら近き年に此辺大地震にて、一家も残りなく民家潰れ、死亡の人かぎりなく、相つゞき凶年にて飢渴に及び、数多の死人ありしゆゑに、かくのごとしと案内の者云ひしなり。

(仙台) 扱仙台城下は先達て聞しよりおほひに違ひ、町々草ぶきの小家まじはり、見ぐるしき所数町あり。町の長さ五十余町。往来筋にても、町内には小石数多ありて河原のごとし。御巡見使、夜に入りて御着ありしに、家々よりあかりを出せしに、提灯はまれにて、角行灯の古き多し。是等を見ても町内の困窮を察せし也。六、七年以前の寅卯の凶年には、下民数多飢渴して死せし事にして、昔の形はなしと土人の言也。ばせをの辻といふ所一、二町ほど能見えし也。

弘前藩を訪れた古松軒は、弘前から津軽半島東部の平館までは卯年(天明3年)の冷害凶作以降田畑が荒廢したままであるという情報を耳にし、元来米が豊かな地域であるが故、多く備蓄することがなくこのようになってしまうことが多いと教訓を綴っている。さらに青森も地震と凶作飢饉によって疲弊しており、仙台もまた飢饉で多数の死者が出た影響で昔の家居の面影はなく、城下は困窮していたと記している。凶作に関する情報であるから当然のことだが、ここでは飢饉の状況観察の際、その地域の米の生産具合にもまなざしが向けられていること、さらに飢饉による社会の疲弊状況を描写する際、軒数や屋根草といった家居の様子が詳しく記載されていることに注目しておきたい。つまり、凶作・飢饉を起点に米や人々の暮らしに対するまなざしが派生しているのである。また、弘前から平館の場面では、米どころであることにあぐらをかき、備蓄がなかったために飢饉が深刻化したとの主旨で論じられているが、古松軒は弘前から浪岡にかけての民情を記した他の箇所では「百姓の体あしく」と評している。これは、水戸藩領内での「人家のもやうもよく、百姓の妻子に至るまでも賤しからず。作業も出精せると見えて作物も見事」(史料7)という評価と完全に対照をなしている。飢饉の被害には当然地域差があろうが、古松軒には、飢饉の被害が長期化し田畑の荒廢が続くかどうかは「百姓の体(ありさま)」によるという見方があったのではないだろうか。いずれにせよ、ここでは凶作・飢饉の記述と連動する形で各地の米や住民の暮らしぶり、さらには人性が記録されていることを確認しておきたい。

なお、古松軒と同様の見方は、天保飢饉後の天保11年(1840)に水戸藩領を通行した小津久足にもみられる。史料10で示した通り、久足は水戸藩領を含む浜街道地域を米国だと評する一方で、「すぎし荒年」(天保飢饉)の影響で空き家となった家の柱が残っている光景を記している。飢饉・米・暮らしを一体として捉えた描写だといえるだろう。

天明期以降の知識人が旅先の領地・領民の様子を注視し、それを記録するようになった背景

には飢饉があったのではないだろうか。無論、飢饉は天明期が初めてではなく、宝暦をはじめ、日本列島は18世紀に何度も飢饉に見舞われており、その意味では、こうした記録の開始はさらに遡る可能性もあるだろう。ただ、天明・天保飢饉は近世最大級の歴史的災害³²であり、そのインパクトは強烈であった。18世紀後半以降を生き残った人々はどこかで飢饉について風聞し、あるいは実際に飢饉を体験していた可能性が高い。加えて、水戸藩領を通行した他領知識人の多くは被害が深刻だった東北地方にも足を運んでおり、古松軒や久足のように飢饉の傷跡を現実を目の当たりにした者もいた。その他の要因についても当然検討すべきだろうが、旅先の領地での農作物生産状況や領民の人性、暮らしへのまなざしが醸成された1つの背景には、とくに18世紀後半以降の凶作・飢饉への関心の高さがあったと考えておきたい³³。

おわりに

ある藩に対して、他領民はどのような認識を抱いていたのか、すなわち他領民の藩認識という観点から道中日記・紀行文を分析してきた。他領民は水戸藩を称賛しており、藩に対して好意的な印象を持っていたのだが、より具体的に結論を整理すると次のようになる。

まず藩主家である水戸徳川家について、他領知識人は明君の誉れ高い2代藩主徳川光圀に崇敬の念を示していた。それは礼節に厚く、質朴を好む品格に秀でた聖人としての光圀と、領民の奢侈を戒めて農業に出精させ、同時に領民の教化をはかり、いわば藩の繁栄の土台を築いた治者としての光圀であり、こうした光圀像は言行録である『西山遺事』等、彼にまつわる書物を通じて形成されたと考えられる。近世の知識人が、在りし日の歌枕的な名所の風景など過去への回帰を目的に旅をしていることはすでに指摘されている³⁴が、本稿では彼らの過去への回帰から明君信仰といっても良い側面が見出せたことになる。

一方で、各々が旅した時代の現政権に対する他領知識人の関心は薄い。古川古松軒は、18世紀後半の領内で作物が実り豊かなのは、100年前の光圀の善政によって女性から子供までが農業に出精する国風が築かれていたからだと言及している。久足が旅したのは藩の天保改革を推進した9代藩主徳川斉昭の時代であるが、『陸奥日記』中の斉昭の治政に関する言及は少なく、例えば中国の瀟湘八景になぞらえて彼が千波湖に建立した「儷湖暮雪」碑についても、久足は光圀の後にこのような君主が現れたのは大変尊敬すべきことだと、光圀を引き合いに出して斉昭の功績を称えている。水戸藩領内に在住していないが故に、『西山遺事』等の書物の影響力はことに強く、「水戸藩といえば光圀」というイメージが意識化されていたように思われる。これに対し、水戸藩在住の知識人の認識がどうであったかが気になるところだが、一例を挙げれば、藩の儒学者で郡奉行などを歴任した小宮山楓軒は、文政10年（1827）に療養のため仙台藩の鳴子温泉を訪れているが、水戸を出立して早々に、侍として生まれ、太平の時代に

自分の療養のために長途の旅に出られることは「君恩ノ^{アリガタキ}感カギリアラザルコト」と、主君の治政への感謝を綴っている³⁵。文脈から、ここでの「君」は光圀ではなく、当時の藩主徳川齊脩を指すと考えるのが妥当であろう。本稿の成果として、明君への他領知識人の信仰と、それと表裏一体となっている現政権への関心の希薄さの双方に注目しておきたい。領民の支持・信仰を集めた藩主がいたとしても、その評価は他領民の認識を踏まえて検討すれば変わってくる可能性があるだろう。

なお、水戸藩と同じような例は米沢藩でもみられる。幕末期に米沢藩を訪れた学者や武士が著した米沢藩見聞録では、領内の豊かさや人々の勤勉さといった藩の富強ぶりが、18世紀後半の藩政改革を主導した上杉鷹山の「美政」によるものと評価されている³⁶。光圀も鷹山も明君として知られていたことに鑑みれば、本稿の成果をより一般化する上では、さらに別の藩でどのような傾向が導き出されるかを今後検証する必要があるだろう。

次に、18世紀後半以降には、人々が体験し、伝聞していた飢饉を1つの背景として、領地の生産状況や領民の人性に対するまなざしが生まれてきたと推測される。水戸藩の領地や領民に対しては、他領知識人は米の実りが豊かな土地であり、それは領民の勤勉な農業への出精に起因しており、また領民は礼節に厚く、質朴であると認識していた。この時代の水戸藩で米が豊富に取れるという情報は、同年代に領内の社会的・経済的農村荒廃が顕著になるとする理解に対し、従来とは異なる領内の社会評価が見出せる可能性を示している。また、他領知識人は、こうした農業生産の状況や領民の人性が光圀の遺沢によるものだと認識していた。実見すれば明白な田畑の状況はともかく、領民の礼儀正しさや質朴さについては、光圀への信奉が領民の人性を美化して捉えることにつながっている可能性も否定できず³⁷、この点についてはさらに別の藩の領民に対する認識も確認しつつ、理解を深めていく必要があるだろう。

最後に、以上のような明君信仰や領地・領民に対する認識は、あくまで知識人のものであることを改めて確認しておきたい。道中日記をみる限り、水戸藩領への特段の関心を読み取ることにはできず、他領の庶民が『西山遺事』等を熟読し、それに感化されて旅をしていたとは考えられない。本来、他領の農作物の実り具合や領民の暮らしといった日常的な事柄に関心を寄せるのは農民たちであろうが、その農民を含む庶民層が道中日記中で他領民の日常を語らないことをどう理解すればよいのか。考察は残された宿題であろう。

本稿は、藩研究の充実化を目的に、その第一歩として旅行者の記録から藩領内の社会を覗き見る試みであって、他にも課題が多い。近世には領主から民衆までの幅広い層が「御国風」(地域性)を自覚していたといわれており³⁸、旅行者の出身地やそこで培った思想的背景といった要素を分析に落とし込んで水戸藩に対する見方を検証することにも興味をひかれるが、今回は手が及ばなかった。ただ、これまで指摘されてきた領民の現藩主に対する認識や領地に対する見方とは相容れない要素を抽出でき、その点で藩を外部から客観的・相対的に捉える足がか

りを示すことができた。近年の近世史研究では、藩の方により軸足を置き、藩の動きと旅行史の関係性を問おうとする意欲的な試みもみられる³⁹。こうした研究も踏まえつつ、今後も旅や交通の視点から藩研究その他の隣接諸分野に新たな知見を提供していきたい。

※水戸藩の旅行史に関する先行業績については、添田仁氏に数多くご紹介いただいた。記して御礼申し上げる。

※本稿は、科学研究費補助金基盤研究（B）（課題番号 19H01293、研究分担者、研究代表者 佐藤大介）および 2020 年度学内研究助成費（7-174）の成果である。

- ¹ 代表的な成果として、岡山藩研究会編『藩世界の意識と関係』（岩田書院、2000年）、岸野俊彦編『尾張藩社会の総合研究』（清文堂出版、2001年）、渡辺尚志編『藩地域の構造と変容—信濃国松代藩地域の研究—』（岩田書院、2005年）、稲葉継陽・今村直樹編『日本近世の領国地域社会—熊本藩政の成立・改革・展開—』（吉川弘文館、2015年）を挙げておく。
- ² こうした 2000 年代以降の藩研究の成果については、高野信治「大名と藩」（『岩波講座日本歴史 11 近世 2』岩波書店、2014年）、同「『藩』研究のビジョン」（『近世領主支配と地域社会』校倉書房、2009年）を参照。
- ³ 谷口眞子「無礼討ちに見る武士身分と社会」・泉正人「藩庁文書の伝来秩序と藩職制—岡山藩大坂留守居作成文書を素材に一」（前掲注 1『藩世界の意識と関係』）、後藤真一「京阪地域と尾張藩」（前掲注 1『尾張藩社会の総合研究』）など。
- ⁴ 深谷克己「百姓一揆の意識構造」（『増補改訂版・百姓一揆の歴史的構造』校倉書房、1986年）。
- ⁵ こうした藩の捉え方については、高野前掲注 2「大名と藩」を参照。
- ⁶ 引野亨輔「近世後期の地域社会における藩主信仰と民衆意識」（『歴史学研究』820、2006年）、落合延孝『猫絵の殿様 領主のフォークロア』（吉川弘文館、1996年）95-128頁。
- ⁷ 深谷克己『百姓成立』（塙書房、1993年）26頁。
- ⁸ 高野信治「先祖の祭祀」（『武士神格化の研究 研究編』吉川弘文館、2018年）、岸本覚「長州藩藩祖廟の形成」（『日本史研究』438、1999年）。
- ⁹ 小関悠一郎『上杉鷹山「富国安民」の政治』（岩波書店、2021年）2-5・204-225頁、同「明君象の形成と民衆の政治意識—阿波国小松島浦船頭専助と細川重賢明君象—」（『明君』の近世—学問・知識と藩政改革—）吉川弘文館、2012年）。
- ¹⁰ 瑞龍山に関する説明は、とくに断らない限り西野保「瑞龍山水戸徳川家墓所」（『日本歴史』842、2018年）、徳川斉正・常陸太田市教育委員会編『常陸太田市内遺跡調査報告書 水戸徳川家墓所』（常陸太田市教育委員会、2007年）に拠っている。
- ¹¹ 『茨城県史料 近世地誌編』（茨城県、1968年）。
- ¹² 小関前掲注 9『上杉鷹山』109頁。なお、残る 4 人は、米沢藩主上杉鷹山、熊本藩主細川重賢、岡山藩主池田光政、会津藩主保科正之である。
- ¹³ 西山荘に関する説明は、とくに断らない限り常陸太田市史編さん委員会編『常陸太田市史通史編上巻』（常陸太田市役所、1984年）に拠っている。
- ¹⁴ 高橋陽一「旅の行程とその特徴—道中日記・紀行文の統計的分析—」（『近世旅行史の研究—信仰・観光の旅と旅先地域・温泉—』清文堂出版、2016年）。
- ¹⁵ 堀辺武「東北地方からの伊勢参宮と常陸国—道中日記からルートを探る—」（『茨城の民俗』44、2005年）。
- ¹⁶ 堀辺氏が収集したが筆者が確認できなかった道中日記、および筆者が新たに収集できた道中日記がある。
- ¹⁷ 高橋陽一「多様化する近世の旅—道中日記にみる奥羽からの上方旅行—」（注 14 前掲書）、岩鼻通明

「道中記—旅のなかの信仰」(『出羽三山信仰の歴史地理学的研究』名著出版、1992年)。

¹⁸ なお、他領の庶民が水戸藩領を通行するパターンとしてもう1つ考えられるのが、関東方面から出羽三山(現山形県庄内・村山地方)への旅である。月山・湯殿山・羽黒山の出羽三山もまた近世の人々の信仰を集め、関東では千葉県域が出羽三山信仰の盛んな地域であった。この出羽三山参詣の際にも旅行者が水戸藩領を通行することがあったが、岩鼻通明氏の研究(前掲注17)によれば、棚倉街道を通過したとみられる例はごくわずかであり、本論の主旨に影響を及ぼすものではないと考えられる。

¹⁹ 鈴木暎一『水戸光圀』(吉川弘文館、2006年)6-7頁。

²⁰ 明君録については、小関前掲注9『上杉鷹山』106-111頁、深谷克己「明君録—期待される君主像」(鶴飼政志ほか編『歴史をよむ』東京大学出版会、2004年)などを参照。

²¹ 『西山遺事』(徳川侯爵家蔵版、1935年、国立国会図書館デジタルコレクション)。

²² 『陸奥日記』(史料6)は、光圀に関連する水戸藩領内の史跡や領民に関する記載が詳しく、光圀関係の書物を多数読み込んでいた久足の彼への傾倒ぶりが際立っている。

²³ 羽賀祥二「序論」(『史蹟論—19世紀日本の地域社会と歴史意識—』名古屋大学出版会、1998年)。

²⁴ 『仮名草子集成62』(東京堂出版、2019年)。『丙辰紀行』の評価については、板坂耀子『江戸の紀行文 泰平の世の旅人たち』(中央公論新社、2011年)19-37頁を参照。

²⁵ 『新日本古典文学大系98 東路記 己巳紀行 西遊記』(岩波書店、1991年)。

²⁶ 注25前掲書。

²⁷ 『近世紀行集成』(国書刊行会、1991年)。

²⁸ 『己巳紀行』では、わずかに「和泉の国は土地肥饒にして、農人等耕作に力を用ひ、五穀菜蔬をうゆるに甚精し。故に麦及菜など、他国にはるかに倍して尤美なり」という記述がみられるが、これは大名の領地ではなく、和泉という国を単位にした土地の評価である。なお、近世紀行文学における貝原益軒の評価については、注24前掲書の板坂耀子氏の解説を参照されたい。益軒紀行文で旅先の生活描写がない理由として、氏は、益軒が卑俗な旅の日常を事細かに記すことを実用的だと考えなかったからではないかと指摘している。

²⁹ 乾宏巳「水戸藩の天保改革」(『水戸藩天保改革と豪農』清文堂出版、2006年)。

³⁰ この点、19世紀前半に郡奉行として藩領南部の農村復興を主導した小宮山楓軒の治績が『清慎録』(大内正敬著、『日本農民史料聚粹11』巖松堂書店、1941年)に記録されており、これによると村民は気質が悪く、「多く懶惰者にて田畠年々荒果」る、つまり怠惰で農業を怠っていたため田畑が荒れ果てていたという。こうした領民気質が全藩的だったかどうかは現段階で確証を得ないが、領地の評価同様、他領知識人の見方が水戸藩領民の新たな評価を見出す可能性があることを指摘しておきたい。

³¹ 青木美智男『全集日本の歴史 別巻 日本文化の原型』(小学館、2009年)317-338頁。

³² 東北をはじめとする近世の飢饉の被害状況については、菊池勇夫『近世の飢饉』(吉川弘文館、1997年)などを参照。

³³ ヘルベルト・ブルチョウ氏は、古松軒の地方生活水準・文化水準の測り方の基準の1つに経済的な指標があったと述べているが(『江戸の旅日記—「徳川啓蒙期」の博物学者たち—』集英社、2005年、80頁)、これは古松軒に限らずこの時代の知識人に共通した捉え方だったと考えられる。

³⁴ 高橋陽一「石碑のある風景—近世の知識人と松島—」(注14前掲書)、原淳一郎「鎌倉の再発見と歴史認識・懐古主義」(『近世寺社参詣の研究』思文閣出版、2007年)。

³⁵ 『浴陸奥温泉記』(『随筆百花苑3』中央公論社、1982年)。

³⁶ 小関前掲注9『上杉鷹山』3-5頁。

³⁷ 鈴木注19前掲書6-7頁によれば、光圀の事蹟・逸話に触れた書物が近世後期には多数みられるようになり、光圀の人間像は誇張・美化されていったという。

³⁸ 若尾政希「地域意識を問い直す—プロローグ—」(若尾政希・菊池勇夫編『江戸の人と身分5 覚醒する地域意識』吉川弘文館、2010年)。

³⁹ 原淳一郎『近世の旅と藩—米沢藩領の宗教環境—』(合同会社小さ子社、2021年)。

The recognition to feudal clan of other people of the fief : A case of travelers to the Mito clan territory

Yoichi TAKAHASHI

This research is the attempt to make a study of feudal clan in early modern Japan. Feudal clan study has progressed after 2000, but it's been basically advanced by focusing on people and things within a clan's territory. I think it is also necessary to confirm the point how other people of the fief were recognizing the feudal clan to make the reality of it clear and the study. This means that we can understand the feudal clan relatively and objectively. To achieve it, I analyzed the records of travelers of other people of the fief ("Dotyu-nikki" written by common people and "Kikobun" written by intellectuals) in this research. I analyzed the Mito clan as a target, and made it clear how the travelers who visited from other fiefs recognized feudal lords, territory and people of the Mito clan.

After analysis, it became clear that the intellectuals of other fiefs had a great deal of respect for the 2nd feudal Lord Mitsukuni Tokugawa known as a great lord. In other words, they believed in him. They honored him as a person of integrity and a ruler who governed people rightly. I think that this impression of Mitsukuni was formed by the books about him, for example "Seizan-iji" (a record of his sayings and deeds). On the other hand, they didn't have the interest in the other feudal lords of the Mito clan in the time when they traveled.

Next, the intellectuals of other fiefs after late 18th century recognized that much rice could be harvested in the Mito clan because of the diligence of people for farm work and people respected good manners and were honest. It has been considered that rural devastation of the Mito clan became noticeable in this age until now. The fact that much rice could be harvested in the same age indicates that there's a possibility we can understand the society of the Mito clan in a different perspective. In addition, they recognized that the remains of Mitsukuni created this agricultural production status and people's character.

Finally, I want to emphasize that it was the intellectuals to the last who had recognized the situation as described above. As long as I read the record "Dotyu-nikki", common people of other fiefs didn't have the interest in the Mito clan territory. I can't think that they read "Seizan-iji" carefully and traveled being influenced by it.

In this research, I could extract the fact which is inconsistent with the conventional view on the feudal lord and the territory of feudal clan and seize an opportunity to catch a feudal clan relatively and objectively. I will continue providing new knowledge to other related fields in terms of travel and traffic.